

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

24

第三七回受賞作品（一九九六年）

## 千葉市美術館・中央区役所

後編

前編では、旧川崎銀行千葉支店の保存を望む声と、建築家の大胆な発想によって、保存建物と千葉市美術館・中央区役所の一体化が果たされた経緯を紹介した。後編では、伝統的な工法が駆使された施工と、「さや堂ホール」の活用を紹介する。

### ネオ・ルネッサンス様式のホールが人々を魅了する

「さや堂ホール」は、千葉市美術館・中央区役所の複合施設を建てる際に、古い建物をすっぽりと覆うことによって、主屋を取り壊すことなく再生・保存された。外観の正面の静かな佇まいから一転して、内部は一〇本の円柱が二列に整列し、天井の格子状の梁を支えるダイナミックな空間である。建築史ではネオ・ルネッサンス様式とされ、西欧古典建築の基本形を踏襲しているという。柱と空間のバランスが安定感をもたらし、シンプリな装飾や仕上げは誠実で潔い雰

囲気をつくりだしている。「さや堂ホール」の保存とそれを取り囲むように新築された建物は、大谷幸夫氏（大谷研究室）の設計により、施工に臨んだのは清水・西松・ナカノ・三菱JV（建設共同企業体）。一九九一年九月～一九九四年十一月まで、限られた敷地内で工夫を凝らしながら再生・保存と新築が並行して行われた。

### 地下を設けるために保存建物を「曳家」で移動

新築部分では、新たに地下三階を設けるために、保存建物の下を



1971年から市役所の出張所にあたる中央地区市民センターとして使われていた。（提供：岡部則之計画工房）

「さや堂ホール」の内部。旧川崎銀行千葉支店の主屋を再生・保存し、活用するために床のステージや照明設備などを設置した。千葉市美術館・中央区役所の建物がこれを抱えるように建てられた。旧川崎銀行千葉支店は1927年の建築で、矢部又吉（1888～1941年）の設計とされる。

※大谷幸夫（1924～2013年）：丹下健三に学ぶ。71年東京大学工学部教授、84年千葉大学工学部教授。退官後、大谷研究室主宰。主な作品に「国立京都国際会館」「金沢工業大学」「沖縄コンベンションセンター」などがある。

曳家の様子は一般公開され、合計約1,400人が見学した。写真は1993年3月、B工区からA工区へ戻しているところ。仮置き期間中にA工区では地下階を設ける工事が行われた。左側に見える鉄骨は新築建物のファサードの柱。



曳家の状況。敷地の前面の保存建物が建っている部分をA工区、奥をB工区とし、平成4年5月にAからBへ往路の曳家を実施された。上/A工区でジャッキアップされ、B工区へ向かう。下/24.5m移動し、B工区に仮置きされた状況。(提供：岡部則之計画工房)



どのように施工するかが大きな課題だった。保存手法の検討と設計については大谷研究室の岡部則之氏が担当し、二つの工法による設計を提示して施工者と協議した。一つは「曳家」を実施し、保存建物を敷地の奥に移動してから地下階を施工し、再び所定の位置に戻す方法、もう一つは保存建物の基礎の下を掘り下げながら階をつくる「逆打ち工法」と「曳家」を併用する方法である。曳家は伝統的な工法で、木造家屋などを移動する際に一般的に行われてきた。昔はコロや竹の上を滑らすように、馬や人力で建物を引いたが、今では数千トンのビル建築の下に転動装



岡部則之計画工房  
(元・大谷研究室)  
岡部則之

置とレールを入れて、油圧ジャッキで押して動かすまでに進化した。関係者で協議した結果、本工事では曳家工法を採用。振動などによって保存建物を損傷しないことが市の優先事項であり、曳家は完全に移動ができ、施工精度も高いという実績があった。J.Vの所長を務めた清水建設の金井俊夫氏が振り返る。「私もスタッフも曳家の経験はありませんでした。当時、清水建設には実施例が二件あった

ので、施工にあたり、曳家専門の協力会社と一緒に基本原理から皆で学んで共有し、万全に対応できる体制を組みました」。実は曳家のポイントは建物をジャッキアップして「浮かす状況」をつくる段階までであり、移動する工程はほとんど問題なく進めることができるとのこと。そこで、金井氏は重量約三、〇〇〇トンの保存建物を動かすという劇的な場面を、一般公開しようと提案した。「こんなにおもしろい現場を市民の皆さんに見せない手はないと思いました」と金井氏。現場スタッフの意気も上がった。この公開によって市民から信頼が寄せられるとともに、市と大谷研究室、施工者の三者に一体感が生まれていった。



「さや堂ホール」の向かって左手に中央区役所のエントランスが設置されている。ガラス越しに「さや堂ホール」の外壁が連続しているの見える。ホールの右手には美術館のエントランスがある。

施工者より

異なる工事が並行  
搬出入の動線計画もポイントでした



清水建設株式会社(当時)  
金井俊夫 Toshiro Kanai

曳家の準備工事として、建物内部の床から地中梁と柱の周辺を掘り、仮受け・本受けといったサポートを設置し、全体が水平になるようにジャッキアップをするのですが、掘り進むときに、土圧のバランスが変化して不同沈下を起こす恐れがあります。部分的に傾けば保存建物が悪影響を与えるので、細心の注意を払って掘削を進めました。不同沈下は掘ってから一時間とか二時間たつてから起きるので、予兆のような動きが出ていないか計器で随時チェック

し、勤を働かせることも必要になります。二度ほど沈下の兆しが出たことがありましたが、すぐに対処して抑えることができました。曳家の一般公開は、長年町の顔だった大きな建物を本当に動かせるのかと、市民の関心が寄せられました。パンフレットとパネルをつくり、説明会を設けましたが、当日の見学者は約一、四〇〇人になり、午前・午後で合計二回も開く結果となり、うれしい悲鳴を上げたことが思い出されます。また、敷地をA工区とB工区の二つに分けて、保存建物と新築でそれぞれ異なる工事を並行させるため、資材の搬入と、土砂などの搬出がうまく流れるように、車両の動線計画を行うことも大きなポイントでした。竣工したときには市の関係者の方々も、大谷先生もたいへん喜んでくださったので、やり遂げたうれしさはひとしおでした。

運営・維持管理者より

町の歴史を宿す建築は  
市民の「心のケア」も担っています



千葉市美術館館長  
河合正朝 Masatoshi Kawai

千葉市美術館はさまざまな建設事情のなかで、地元に対する市民の思いが込められた「さや堂ホール」と結びつくかたちとなりました。現在、「さや堂ホール」は企画展などの際に、作品展示や音楽イベントなどに使っていますし、一般に公開して、多目的に利用されています。

活用には保存と相反する面もありますが、手を入れながら活用することで、建物に新しい生命を吹き込むことが必要です。その点で、「さや堂ホール」は再生をするときに、迫り上がる舞台など、次の時代に活用できる機能を入れていきます。これは当時の関係者に先見性があったと思います。美術館は都市や町の器官であると言われていきます。町全体が市民と共に健やかであるために美術館は機能していかなければなりません。同時に市民は自分の身体のように町を守る役割をもっていることになり、そのような意味で歴史を物語る古い建物が残されていることは、とても大切なことだと思っています。そこは、「学びの場」「憩いの場」であると同時に、人々が生きていくための「心のケア」をする歴史的な拠り所になります。これからの時代に、大きな意味をもつのではないのでしょうか。

## 職人の伝統技術が 活かされた保存工事

保存建物は敷地の奥に二四・五  
で移動して仮置きされ、外壁洗浄  
やコンクリートの劣化を防ぐ中性  
化対策、構造体の壁厚を増やす耐  
震補強などが行われた。一〇カ月  
後に再び曳家を行い、すでにつく  
られた地下の構造体の上にジャッ  
キダウンすると、内部の修復、仕  
上げなどが行われた。内部は戦時  
中の物資の供出で、柱頭や柱脚に



11階東側に設けられたレストラン。眺望が良く、人気が高い。天井は大谷氏のデザインで、星座がモチーフになっている。

使われていたブロンズ、吹抜けの  
回廊の手摺といった金物類を失い、  
代用品が付けられていた。過去の  
資料をもとにそれらの修復と、仕  
上げ工事を行った。天井や壁・柱  
の漆喰仕上げ、石張りや左官工事  
による洗い出し仕上げ、床タイル、  
木部の埋木による補修など、昭和  
初期の技術に通じた工事会社の親  
方や職人が集まり、伝統工法の技  
の見せ所とばかりに熱っぽい現場  
が展開したという。「昔の技術を  
若い職人に教える場にもなってい

ました」と金井氏。並行して、保存  
建物を覆う鉄骨造の美術館と区役  
所はスムーズに建ち上がっていった。  
**時間をかけて成熟していく  
美術館と「さや堂ホール」**

オープンから二〇年、千葉市美  
術館は学芸員の長年の努力の積み  
重ねが近年花開き、全国からの来  
館者が増えている。江戸絵画や房  
総ゆかりの美術を丁寧で紹介し、  
他では見られない独自の企画展が  
注目されている。美術館とともに

歩んできた「さや堂ホール」につ  
いても、さまざまなかたちで活用  
されているという。展示や舞踊、  
市民の自主イベント、また、映像  
撮影の背景に使いたいというオフ  
アームも多い。訪れた人たちから、  
ホールの空間の魅力に気づいたと  
いう反応も寄せられている。再生  
されて歴史を重ねるホールの存在  
感は、長年親しんできた人たちに  
喜びをもたらし、同時に若い人た  
ちの記憶にもゆつくりと時間をか  
けて浸透していくにちがいない。



昨年、企画展「仏像半島展」ではインドの古典舞踊や、仏教の声明（しょうみょう）のイベントが、「さや堂ホール」を使って開かれ、多くの人が楽しんだ。ホールの活用の幅が広がっている。（提供：小田切淳子）